五月作品

小田部　雅子選

在外者投票券　　高　橋　みどり＊イギリス

在外者投票券持ちロンドンで投ずる一票ささやかな「ノー」
戦争を止められなかったあの時を知らぬ人らのサナ活無邪気
「戦前の元年」となる幕開けか戦後八十一年、二月
この道はいつか来た道　イシグロの『浮世の画家』を読み返す夜
かわいい、と君が推してるサナちゃんは君のお金で戦争をする
なすすべもなく見守った総選挙　右へ右へと母国傾く

湯タンポの湯　　風　張　景　一　青　森

妻のゐぬさみしき日々をもてあます吹雪つづきの冬を籠もりて
家族の手借りず自分に出来ること湯タンポの湯を沸かすゆふぐれ
椅子の位置ずらして午後の窓ぎはに書を読みつづく如月吹雪
明日にも床に臥すやも知れぬ老はやく目覚めぬ　投票に行く
俺の死後遺りし家族しんぱいといまだ誰にも言ふ機会来ず
宿痾よりのがれられざる老いぼれが脇腹さすり座にゐるバースデー

その一集

ひゅいと飛び越し　　成　田　裕　子＊青　森

雪晴れて空の蒼さは冴えわたり息の中にもひかり宿りぬ
凍て道をトロッコのごと車ゆくただひたすらに轍なぞりて
土ぼこり混じりの風が舞い上がる積まれた雪はそしらぬ振りで
春めいて風だけ先に軽くなり冬の私を追い越していく
春の風ほこりっぽくてはしゃいでる雪のかたまりひゅいと飛び越し
残酷なほどに綺麗な青い空ずっと雪だけ見てきた眼には

雑草の一　　小野寺　政　賢　岩　手

送葬の鐃鈸（ねうばち）のごとく刻を打つ居間の時計を湯船に聴けば
酢漿草（かたばみ）は〈雑草の一〉と素つ気なし手帳版の電子辞書には
人口の減少憂ふるわが国で避妊薬市販の門戸開かる

みどり児のむつきを替ふる様見れば人は皆がらこの時を過ぐ
熊よけに吊しし軒の風鈴が軽やかに鳴る立春今日は
畢竟は可燃物にて余熱ある火床囲みてみ骨を拾ふ

手になじむ包丁　　畠山参治　岩手

手になじむ包丁なれば半年ごと訪ふ研師にそれを委ぬる
週一度夕飯配達受ける身の今週のそれはこびくる人
寒ければ暖房器具をふたつ据ゑミラノ五輪を見てゐる朝
石盤にてふてふなどの文字書きて国民学校の門をくぐりき
収集を止めた切手をよせ集め百十円の封書したたむ
人少な山峡なれば昼さがりねこ一匹の道下りゆく

水上　芙季選

会長選挙　　引間三郎＊埼玉

淀みたる池の水面の枯れ葉などすくって捨てる小春日の昼
見せかけの雨雲去りて薄日射す秩父のやまの山火事消えず
山肌に雪の残れる山並みが遠ざかりゆく秩父鉄道
渇水のダム湖の底の見えていて人の住みたる痕跡あらわ

梅の花ほころぶころの自治会の押し付け合いの会長選挙
山火事の消火行うヘリ飛びて煙広がる秩父の山に

ゆっくり外す　　石山朱音＊神奈川

あなたとは違う世界で泳いでる私の海は私のものだ
この痛み何度目だろう新しく傷つくことに慣れそうにない
知らぬ間にミモザが黄色になっている光を帯びる川沿いの道
しっかりと身につけていたマフラーをゆっくり外す春の予感に
リカちゃんは昔の私を覚えてる何百回も着せ替えたこと
リカちゃんのこの微笑みはにせもので淋しい私に寄り添ってくる

いちごさん　　末光奈緒子＊神奈川

十日前変えていましたパスワードパソコンだけが覚えています
べっぴんの新種の苺「いちごさん」は内まで赤い恥ずかしがり屋
橋上より新幹線を跨ぎたくわたしは足を大きく開く
不用品無料回収うたう紙の裏に生まれる詠歌の一歩
半額の赤いシールのカレンダー　二月に選ぶ初日の出と富士
京急の赤い車両が菜の花と河津桜の間を駆けぬ

「＋１」　　人見江一＊神奈川

「ばけばけ」の「日に日に世界が悪くなる」気だるい歌に始まる一日（ひとひ）
よどみなくスノボー選手の技の名を叫ぶ実況アナウンサーは
ジャンパーの滑走前に雪払い競技支えるブロワー隊は
リンクでは四人の競技　黙々と石の滑りを測るリザーブ

「＋1」頭に付いた着信があるけど出るな、詐欺電話なう
歌会では六十代は若手なり設営、受付、こまめに動く

黐の木

奥　浩昭　東京

古文書に廿日なる語を見て思ふ教へ子の「廿日出」君のいま
深大寺の鐘のなるなかけふをもて閉店といふ茶房に入りぬ
甘鯛や章魚、古本などをながめゆく出町桝形商店街に
〈蛸薬師通新町東入る〉訪ねてみたしゆゑあらなくに
冬の宇佐〈双葉の里〉の白鵬の手形はひろし白鵬いづこ
一票を投じたるのちやはらかに雪をかぶれる黐の木を見る

田中　愛子選

雪かき名人

坪井真里　東京

少年の着古しシャツのほの温し　もうひと働きしてねと裁りぬ
九千歩あるきほどよく草臥れて怒りはあはきかなしみになる
地吹雪が庄内平野を襲ひたり視界おぼろな真冬の帰郷
マリチャンが帰つてくると雪をかき道をつくりてくれし隣人
積む雪にさくりとシャベル突き刺せばたちまちわれは雪かき名人
焼酎にエキス抜かれし梅のごと萎む母なり七キロも痩せ

闇

村田久美子　東京

ゆるゆると歩行器押してでこぼこの草はらゆくを夫は好めり
ことばなく夫は長女と見つめあひうなづきあひぬ訣れのときか
帰りくるのぞみなけれど脱ぎゆきし衣類、スリッパ片せずにをり
健やかな日には覚えぬ愛ほしさ、病みたる夫にあふれくるなり
つくりたるめがねは合はず裸眼にて読むコスモス誌の活字は薄い
水仕了へ灯りを消せばしんしんと闇につつまる闇は安けし

記載台

磯貝恭子＊新潟

除雪終え七時の時報の声を聞き五十七箇所の投票所開く
投票所のがたつく記載台の上みんな黙って鉛筆動かす
ここでしか見ることのないすべすべの不思議な紙に候補者名書く
我々は歯車となり黙々と投票用紙を開いて分ける
深夜まで開票作業は続いていく当選確実などわからぬまま
選挙事務が終わりひさびさの日曜日じかんをかけて豚汁作る

若草の道

磯部　剛＊新潟

なにしてもしなくても終わる一日の愛しかりけり冬のさぼてん
家々がクリームシチューの具のように雪に埋もるる魚沼の郷
わが家の北西十里に世界一規模の大きい原発ありて
妻の剝く林檎の皮の赤白が尊くひかる風邪ひきの午後
マシーンの上で走れば若草の道が浮かびぬ　待ってろよ春

昨日のコピーのような今日なれど日陰の雪の一歩明るし

残るもの

斎藤礼子　新潟

筆まめの友より便り届かなくなりて病の篤きを憂ふ
ひとつづつ手離してゆく日々にして最後に吾に残るものは何
孫のやうな労働基準監督官の手厳しき指示に従ふほかなし
大企業の基準を地方の零細の工場にまで押しつける国
残業をせずに済むならよからうに人手不足と断れず受注す
注文を断れば次の受注なし断れず残業してゐるわが社

藤野　早苗選

ごぼり

岩淵洋子＊石川

パッチリと開く黄色に目がとまり菜花の一本束から抜きぬ
雪が降るだあれも来ない出られない孤独の時間さあ楽しもう
靴あとに犬の足跡よりそいて新雪の上に温かみあり
右足がごぼって次は左足抜いてはごぼり雪道を行く
大雪に七日籠りて八日目に歩く足腰衰えている
土見える庭の桜の根びらきに小鳥が群れて土掘りおこす

ホルムズ海峡

池田弘道＊山梨

山奥の灯油価格の急騰でホルムズ海峡の緊張を知る
自らが選んだ判事の判決は「大統領の関税は違憲」
悔し泣き嬉し泣きしたりくりゅうは世界の人も泣かせてしまった
剪定は夏の実りを決定す、寒風の吹くブルーベリー農園
花芽一つ葉芽は三つの割合で枝に残して結実を待つ
iPhoneを鹿に向けるも白い尻上下に跳ねて撮り逃がしたり

東雲の橋

柘植美樹代＊岐阜

雪残る村見渡せば白黒にくっきり分かれる日向と日陰
春近しストンと夜へ落ち込まず光が残る淡青（たんせい）の空
東雲の橋から見下ろす木曽川は谷底を這うやせ細った蛇
初めての言い争いをした朝息子は遠い存在だと知る
令和から見れば昭和は大昔輝きし日々は霞の向こう
桃色が春の使いの色ならば夕暮れ時の空はもう春

ますみこ

古木増美　岐阜

落雪に薔薇の大枝折れてゐる夫のいたつき「寛解はない」と
夫病みて我も病を拾ひけり医療費多き月の増えたり
ゆく雲をときに見やりてくらんくらんしてたら手術後三日目だった
尾張弁きついわあと言ふ看護師の瀬戸弁語尾はすこしはんなり
この人も哀しみの種抱へてる梅ひらくころ病むことに慣れ
「増美子（ますみこ）も病を得たりわかちあふ病を得たり」夫はおどけて

奇襲

大塚守明　愛知

リトグラフはローランサンかと尋ねれば喫茶のマスターかるく頷く
飲み薬併用すれば治るのはすこし早いと医者いふヘルペス
古書店の外に積まれし詩集より字句こぼれたり〈ペシャザル王〉の
奇襲ともいふべき解散総選挙　敵にも民にも時を与へず
自民党・維新の勝たば9条はどうなる息子と議論延々
投票の結果は寒波とかさなりて護憲のものら気持ち重たし

津金　規雄選

ソーラーパネル

高山幸子＊三重

きっぱりとしがらみ落とし大欅はあらたな春へ枝先のばす
まっさらな今日をはじめん身の内に白湯をめぐらせ命浄(きよ)める
薄氷か紙せっけんかあさぞらの残んの月を愛でつつ歩む
つぎつぎと里の田売られたちまちに据え付けられるソーラーパネル
まやかしの無き世であれかし白たえの雪ふるあした投票に行く
オニの面かぶり豆まく園児らの明るき声が凍て空とかす

開いた空間

大池アザミ＊大阪

わたしから切り離される爪の端小さく音をたてて落ちゆく
萩焼の花瓶どければぽっかりと萩焼を呼ぶ開いた空間
靴下の古いと古いを重ね履く助けあうってこういうことか
川沿いに行けばよかったはずなのに川遠ざかりビルに飲まれる
廃屋の窓が朝日をはね返す過去の暮らしを守るかのよう
神さまはいますかそれともいませんか　わたしはもはや六十歳です

白票投ず

津玲海智子　大阪

背まるめ石油ストーブに火を点ける妣の顕ちくる冷えしるき朝
時代劇好みし父にチャンネルを奪はれともに観し幼き日
若葉マークつけてドライブせし頃に見たる夕陽の赤さ忘れず
わが飲めるオレンジジュースもコーヒーも贅沢品のごとく値上げす
減税への本気を疑ふ「検討を加速する」とふ曖昧な言
強引な出直し選挙肯へず白票投ずる府知事の選挙

息子の名前

宮崎美重子　大阪

金柑の甘露煮ひとつ白湯に入れゆつくりと飲むけさむき朝に
投票は権利だからと話しつつ雪の道ゆく若き母と子
生垣に積もりし雪を取り集め若き父親子の手に載せぬ
一時間に一本のみのバス待てどつひに来ざりき法起寺の前
明らかな詐欺の電話に名を問へば息子の名前しれつと答ふ
新しき歌集の中に詠まれゐてその名を残すプリゴジン氏よ

大寒

上月節子　兵庫

正月に生けたる梅が咲きそろひ仄かな香り漂ふ床の間
年明けの一番目なる村行事　池の堤のすすきを燃やす
溜池の堤のすすき焼く日なり消防車も出て態勢ととのふ
薄氷が蓮の枯葉をとぢ込めて池面しづもる大寒に入る
映像はふぶける町を映し出し不要不急の外出避けよと
合鴨に草取りまかせ育てたる米は艶やかひと味ちがふ

水上　比呂美選

北条鯛めし

安井和子＊広島

雪の日は湯船にゆずを浮かばせてプチぜいたくな昼の入浴
火吹き竹、焚きつけ、薪をくべるなど風呂を沸かしことば浮かび来
冬枯れの野に鮮やかなまゆみの実愁い忘れてしまえと紅
ふるさとの高縄山（たかなわさん）や立岩川（たていわがわ）父母なきのちもわれのふるさと
鯛一匹米と一緒に釜で炊くわがふるさとの北条鯛めし
指先がまだ痺れると言いながらキャベツを切りて夫の焼きそば

金の満月

福田かつ子　山口

春立つ日夕暮れ待ちて試歩に出づ五百歩ほどの歩みなれども
週末に帰り来し子を見送りて手を振る方に金の満月
シルバーカー互ひに押して行き合へり年を忘れて大きく笑ふ
塵出しの帰りの空の雲の中真紅の玉の大陽に会ふ
友来たり「星の王子さま」携へてバスには乗らず徒歩八千歩
安青錦対熱海富士の決勝戦相撲の神が微笑むはどちら

ＡＩにきく

松岡綾子　香川

高層のベランダにゆれる体操着みつめてゐるよ広島の川
岳山（だけやま）の静かな冬に映る色パレットの隅にある〈群青色〉
今は無き商店街の〈スカラ座〉は映画少女のゆきつけだつた
お辞儀して立ちてすり足園児らの顔ひきしまるお茶会練習
夫への愚痴しつかり受け止めさりげなく庇ひ立てする生成ＡＩ
ＡＩに値下げ勝ち取るコツをきく営業マンとの交渉前夜

貫の山風

木下幸則　福岡

増殖すビルの合間の駐車場オセロゲームの白石のごと
経済は超大国を踏みつけて上に下にと揺さぶる力
葉群から一瞬もれる日の光時間といふもの見たる心地す
自転車がつらなり渡る砂津橋（すなつばし）移民の少女ら表情かたし
ひこばえの小さき穂先を震はせて貫（ぬき）の山風終日やまず
ひところは遊女ら渡りし石の橋動物園前バス停の側

冬の朝焼け

末広芳子　福岡

早朝に便器を洗ふ人の背をくまなく照らすＬＥＤの灯
〈さわやか館〉のけふのおやつは黒棒ひとつ駄菓子のかをり幼時のかをり
早起きのけふのたまもの三階の窓より見ゆる冬の朝焼け
行く雲を窓にながめてかみしむる春の先取り竹の子ごはん

われだけの幼児期たどるひとり旅このよろこびを大切にせむ
日傘さし石橋わたる母の背がなくがに見ゆるけふのかげろふ

福士　りか選

スキップ　手嶋千尋＊福岡

奇襲やら戦略やらの語彙あふれ突如どうして総選挙、冬
期日前投票箱への最後尾エキストラのごと並ぶほかなし
期日前投票長い列すすみつるりと一票いずこに届く
駅前のセブンがもぬけの殻だった瞬間移動のように閉店
〈ドラえもん〉〈おばけずかん〉に〈こまったさん〉図書館のスター選手は多忙
図書館では走らないでと言ったからスキップしているのかな、君たち

エクレア　黒田邦子　長崎

幸せの黄色のあかり街川に映えて長崎ランタン祭り
貼りかへし障子を透かし如月のひかり届きぬ六帖の間に
大寒の夜は鍋でもしませうか赤児だくごと白菜をだく
ベランダにつぼみふくらむ沈丁花朝戸を繰ればはつかに匂ふ
子供らに平和な日本託したし右傾化すすむ総理演説
評判の店のエクレア二個胸に留守番電話の友の声聞く

眠りよし　関好子　熊本

眠りよし食よし更に通じよし何はともあれよろこばしきかな
此の年も千のつぼみをたくはへて侘助が待つ吾が生れ日を
歳月とふ無賃車両に運ばれて九十と九さい万象に謝す
下り車線も捨てがたきかなデイサービスの空気は常に在りし日の母
夕の陽がすとんと落ちて級友の終の名を消す引き算はきらひ
松の緑めぐらせて立つ山茶花の紅がいかにも偉さうに見ゆ

又ね　福永諒子　熊本

ゆづり受け読みゆく本の頁より君の木箱のにほふ寒の夜
朝焼けのそら鳴き交はす鳥の音は今日といふ日の扉を開く
いづくより来たりて立つや菜を置く卓に小さき夕の虹あり
幾百回「さよなら又ね」交はしたる友が年初に「又ね」を失する
歳月はおろそかならず九十歳の人に病室まあるくなれり
雪積むと歩行器の三人脊梁の遠き雪見る病室の窓

果報者　義原一郎　鹿児島

一日の半分ほどを寝て過ごす果報者とぞなりはてにける
草刈りや除草作業も引き受けて妻の手荒れぬ痛々しけれ
幾本の椰子の梢が生き生きと窓枠の中冬の日の中
題詠は例へてみればリキュールでカクテルさまざま作るがごとし
今月も二人夜なべで歌作る良き日々なりきと後に思ふや
わが歌は何ものならずわが肉の一欠片にて何ものならず

☆　☆